

神戸市看護大学紀要第20巻発刊に寄せて ～本学紀要が果たしてきた役割と今後への期待～

神戸市看護大学 学長 鈴木志津枝

はじめに

1997年3月に神戸市看護大学紀要第1巻が発刊されて以来、今年で20年目を迎える。毎年1巻ずつ年度末に発刊され、今年度は第20巻の発刊となる。第1巻の巻頭言で、中西睦子初代学長が紀要に対する期待を「とくに単科大学では研究者の数もおのずから限られ十分なレフェリー体制を敷きにくいこともあるため、(中略)本学の紀要がそうしたハンディを賢明に克服して、質の高い論文の発表の場になると同時に、学内外の研究者相互の学術交流の媒体として育っていくことを心から願ってやみません」と述べている。これまでの19年間で、本学紀要の目的がどのように達成されてきたのであろうか。

本学の紀要を振り返って

過去に発刊された紀要第1巻から第19巻までに発表された様々な種類の論文総計は330編であり、総説6編、原著論文66編、研究報告66編、資料17編、研究費助成による共同研究実績報告書が175編であった。

研究費助成による共同研究実績報告書を除いた掲載論文数の総計が155編で、各巻で5編から13編とばらつきが見受けられる。論文内容として、教育実践活動の評価や基礎看護技術や教材の開発、ヘルスアセスメント方法の評価、臨床看護学分野の看護実践に関する研究、看護教育学や看護管理学分野の研究、基礎医学の実験研究、地域住民や看護学生の実態調査、英文学研究、民俗学的研究、在外研究報告などが含まれている。これらの研究内容は、教員の日ごろの活動が反映されたものであり、本学紀要の特色である多様な分野の研究論文が掲載されている。

本学紀要は第1巻より査読システムが導入されており、初代学長が質の高い論文の掲載を目指していたこともあり、研究紀要委員会を中心に査読水準のレベルの維持に努めてきている。一方では、投稿者から紀要の査読が厳しいとの意見も聞かれ、掲載論文数が増えないという葛藤も感じていた。平成27年度には、研究紀要委員会主催で査読者育成と質の高い研究論文掲載を目指して「査読の観点と査読報告書の書き方－研究のよりよい発信のために－」をテーマにFDが開催され、参加者より有意義なFDであったとの評価を得ている。今後、さらに質の高い掲載論文が増えることを期待している。

本学紀要の第2巻より、研究費補助による共同研究費研究実績報告書をA4用紙1枚でまとめ掲載するようになった。これらの共同研究には、本学の実習施設の看護職者との臨床共同研究も含まれており、教員の研究活動の成果報告という面だけでなく、地域の看護職者の臨床上の課題の解決にも役立っている。しかし、これらの共同研究が論文として掲載されている数は少なく、学会発表だけでなく投稿論文を増やしていく努力が望まれる。

本学紀要が果たしてきた役割と今後への期待

大学の紀要は専門分野の学会誌と比較され学術レベルが云々される一方で、大学や研究機関の顔であるとも言われている。すなわち、紀要の目次からその大学にどのような教育・研究者が所属しているか、またどのような教育・研究を行っているかを知ることができる。すなわち、本学紀要は、19年にわたって教員各自の「教育実践の総括」や「研究活動の成果」を示す場としての役割を果たしてきたと評価できる。

しかし、これまでの紀要は、大学や研究所等の図書館が所蔵しているだけで、販売されていなかったことや一般的に学術レベルが低いとの評価があったため、読者層に偏りがあったと考えられる。現在、神戸市看護大学では『神戸市看護大学リポジトリ』で、神戸市看護大学教員や大学院修了生が発表した研究成果を図書館のサービスの一環として電子データで公表している。このように、大学の教育研究活動そのものを外部に公開することで、評価を得る絶好の場になると考える。

さらに、神戸市看護大学の「地域住民の健康と福祉に貢献する質の高い看護専門職の育成、またそのための研究という任務を負っている」という建学の精神を鑑み、本学の紀要は質の高い看護実践や教育・研究活動の報告の場になっていく必要があると考える。さらに教育・研究活動の成果を地域住民や実習施設等に示す主要な手段として機能していくことを期待している。

終わりに

神戸市看護大学紀要の第20巻発刊に寄せて、本学紀要が果たしてきた役割や課題、今後に向けて期待することを思いつくまに記載させていただいた。今後、本学紀要が学術誌として、また大学の広報誌的な役割も担いながら、本学の発展と共にさらに発展していくことを心より願っている。